
盆栽の「芸術」化を導いた1920-30年代盆栽界の転回——小林憲雄の盆栽論を手がかりに

横山詢(東京大学)

本発表は、1920-30年代の盆栽界における小林憲雄(1889-1972)を中心とする運動によって盆栽が「美術／芸術」としての地位を獲得していく過程を検討するものである。特に、「美術／芸術」概念やその批評に関する西洋美学由来の用語が、いかにして盆栽の文脈に導入され「日本的」な価値観と結びつくことで正統化されていったのかに着目する。このことは、近代日本における美学の受容・変容過程の一端を明らかにする上でも重要な手がかりを提供する。

小林は、それまで園芸の延長にあった盆栽を「芸術」の地位へと押し上げるべく、同時代の社会的・文化的潮流を巧みに反映した言説を展開し、盆栽の有用性と格式高さを主張した(林進一郎(2019)「盆栽芸術運動」の歴史的背景)。この動きは、近代彫刻家・朝倉文夫らの支援を受けて、東京府美術館での展示会「国風盆栽展」として1934年に結実する。朝倉は彫刻と植物を組み合わせた美術展を設計していた人物であり、園芸にも造詣が深かった(齊藤祐子(2005)「彫刻の社会化—東台彫塑会展と構造社展を中心に—」; 藏田愛子(2023)「美術展覧会の中の植物」)。そのような美術界の人物による盆栽界への関わりを検討することで、美術界から盆栽界への用語・言説の流入とその過程で起こった意味の読み替えを捉えることが可能となる。

本発表では、第一に、書籍や雑誌に収録された小林による盆栽論を再読し、盆栽が「美」や「芸術」との関わりの中でどのように論じられているかを分析する。第二に、国風盆栽展における小林の役割、展覧会趣旨、審査構造を資料に基づき分析し、盆栽が制度的に「芸術」として承認されていく過程を明らかにする。第三に、そうした言説や展示が確立していく過程で、盆栽の園芸植物としての独自性と、絵画・彫刻に類するものとしての特性とがいかにして調停され、「芸術」としての盆栽イメージが形づくられたのかを考察する。

大正期以前、盆栽は料亭での陳列会や座敷飾りとして私的に楽しまれるのが普通であった。しかし1920-30年代には、日比谷公園や百貨店、美術館といった公共空間での展示スタイルが共有され、現在に続く展覧会制度が確立されることとなる。その過程で重視されたのが、「作品」としての盆栽の芸術性であった。盆栽は単なる鉢植えとは区別され、また座敷の空間を演出する一要素としての役割も脱し、それ単体で鑑賞に耐えうる存在へと再定義された。この新たな枠組みは、展示制度の確立、有用性の主張、批評用語の導入、「芸術」への格上げといった一連の変化と相互的に支え合っており、美学史的にも極めて重要な文化現象として位置づけられる。すなわち、小林を中心として盆栽界全体に広がった運動は、盆栽を「芸術」として擁護するだけでなく、「芸術」という概念そのものを日本的な文脈で再構築する営みでもあった。